

# 面

大高芭瑠子追悼特集

117

釦掛け違へて出づる春の服

山独活や旧き四股名の男女川

# おびただし

宮路久子

真夜中の巡回一度水中花  
花茗荷午後からおりてくる僧侶  
菊を焚くおほかたは枯草なれど  
紅葉かつ散る副葬品のおびただし  
壺と壺榎植の位置が入れ替はる  
月代や草臥れはててゐる運河  
運河の灯くづさぬやうに月のぼる  
黒葡萄ユーロ圏下を通りぬけ  
蟬の穴しづかに埋まる国境  
満月のドーヴァー海峡渡りきる

# 遙かなるもの

本田 和子

夏燕頭の一閃の一会かな  
玉虫の占代の彩を掌に  
遙かなるもの偲びつつ鉦叩  
銀漢や素足で歩く砂の上  
さんずいの一筆書の涼しかり  
枇杷熟るる頭の中を種こぼれ  
秋の虹ハープ弾く音のどこよりぞ  
向日葵の続く斉唱白い雲  
秋出水なす術もなく渡月橋  
蔦紅葉仔犬のワルツ深く聞く

# 旅半ば

福 田 葉 子

老 年 に 日 月 早 し 今 朝 の 秋  
ま だ 覚 め ぬ 思 考 の 朝 を 法 帥 蟬  
鎌 倉 の どの 路 地 ゆ く も 秋 の 声  
人 送 る バ ス 停 ま で を 秋 の 蝶  
葉 膳 の 蝗 試 食 す 旅 半 ば  
気 が 付 け ば 既 に 晩 年 一 葉 散 る  
遺 髪 め く わ が 木 の 葉 髪 拾 い ける  
旧 友 を 送 り し あ と の 石 露 明 り  
少 年 が 呉 れ し 秋 思 の オ ル ゴ ー ル  
八 百 万 の 神 在 せ し も ク リ ス マ ス

# ジンベエザメ

遠山陽子

春はあけぼの縮緬じやこをひとつまみ  
ペンギンに肩なくて建国記念の日  
又の名は持たず小林多喜二の忌  
落研出身春泥かるくまたぎけり  
驚 抛 る 赤 き 肉 片 夏 来 る  
父の日やライオンの眼に蠅集り  
にんげんは眼鏡を掛ける青水無月  
日の丸の白きところは夏の海  
八月やジンベエザメを下から見  
共喰ひの鈴虫にして鳴き澄める

## 夢中八句 II

田 口 鷹 生

洞窟に行こか戻るか山つつじ  
萬緑や素の血液の逡巡す  
つれづれのパワースポット蟬時雨  
生も死もあなたまかせの病蚩  
書道展名筆足を引きずつて  
脳細胞しゃにむに使い神の留守  
観音様拝みイギリス料理かな  
残像も消えて夢路の恋煩い

# 日 付

高 橋 龍

夏みかん上長い名前の人が買ふ  
斯くするを斯くはさせじと蚊喰鳥  
斑猫よ飛べどこまでもいつまでも  
デジタルで赤く咲くのもけしの花  
木に蟬を日付なき日は終るなり  
坐らない女にとまれ赤とんぼ  
湾岸でイベリコ豚を食ふ月夜  
かけまくも畏き蛇は穴に入る  
生前は死後に語られ秋深む  
卵殻をモザイクに貼る。種乾く季。

# 草ひばり

渋川京子

屋上に浮かべて月光浴の顔  
千屈菜をかきわけどこまでも他郷  
声のする骨から拾う野分晴  
茱萸を噛むいずれ別るる吾と噛む  
人体に深く入りこむ稲びかり  
秋蟬や山たつぷりと水を吐く  
折り鶴のいくつかは翔ち秋の夜  
次の世も群れて鰯の一尾たり  
流亡も時効の頃の草ひばり  
船酔いに似たり水蜜桃を抱き